

人を想ってください、千年の歌姫たちを

「千年の歌姫たち」

*古今の歌姫たちは和歌の世界の華です

多谷昇太

歌姫や魅入らるままに恋ふるなりあれよあの人きらめく御霊

みたま

額田王へ

百敷や春に追従しげきなか秋そわれはといひしひとはや

小野小町へ

玉造り何の小町ととこしへにな剥ぎそその衣さらしごころに

中宮章子へ…日本一の美人の誉れ高い人。彼女でさえ帝の心移りに悩んだと言う

日の本の一なる桜御身さへ嘆き心に花散らすとは

和泉式部へ

風ともに去りにし君のありしまま千年も枯れぬこはいづみかな

ちとせ

紫式部へ

君が代と言祝ぎなしておもねりて身は浮き舟の紫式部

紫式部・源氏物語へ

大君にはかりかぬれば船浮かべ彼岸さしけむえ渡りたまひしや

同右へ

人の世をあはれと見れば華にかへうたごころもて五行へとひぬ

小宰相へ

辞世歌と見よ黒髪もちて海原にかきて消へなむ平らがぬ身を

宮内卿へ…十代で逝った和歌の天才

暗闇にほたるびひとつあくがればここぞとばかり清き川音

女乞食へ…「ながらへばありつるほどの世の中とおもへば残す言の葉もなし」なる名辞世歌あり

去り行けばもはやはあらぬ憂き世かは岩屋の中へも声はくるとふ

樋口一葉へ…私はニート族に云いたい。彼女は女の身で臆せず他人、他家に関り訪問した。かくあらせばや。

何籠るかろけき足もたるやかに送るたよりは現し身一葉

同右へ…我言挙げ歌

花と咲きお蝶呼びたし我妹子をうもれ木ままでは果たさざるらん

同右へ

恋心夫に我背にあらなくにもみななべて恋しかりとぞ

色香る梅は湯島とさだめしを行きもせぬのはお薦つれかね

鳩鳥の二人ならびてみてしがな写真を撮らむ千代も語らむ

オレンジの皮剥くごとくをみなみの余所衣はがすはつひになからず

とこしへに十五の春のきみをおもふ我世一世のおはりまでもと

「月十一趣」

*月は和歌の世界では特別です

多谷昇太

雲たてて見せみ見せずみつぼねなす月はかぐやにあいきやうづきたり
これはまた今宵の月のふかきことうすぐもいくへかかりていみじう

半月のあかりのごとくかかるなり地には街の灯ひとはのやすらぎ

望月はこころのなかにあらせばや円まるくうつさぬ荒すかぶものゆる

常闇に開きたる通孔あなか中の月塵底人ちりそこびとのあふぎ見るがね

熱帯夜茹だれて寝かね蛇口立つ窓ゆのぞけば中天妖月

猛暑果つしるしともがな名月やむせる夜道にすずむしぞ鳴く

るまち月ひとつの星をともなひてなかぞらかかるはさは娶れとや

平成二十六年一月十五日望月皓と空にありかほど名月いつかあふぎし

中庸のほどよきさまの十日月望を抱ける真摯のすがたか

雲間よりものしりがほに十三夜弱虫爺の気張るを照らす